# 再洗礼派フッタライトと後期近代

2021年２月20日（土）開催の金城学院大学キリスト教文化研究所公開研究発表会において，シンポジウム「再洗礼派フッタライトと後期近代」が行われた。こうしたテーマによるシンポジウムはおそらく本邦初であろうし，海外に目を向けても見つけるのが難しいと思われる。フッタライトという耳目に触れることが稀な人々が，私たちが生きている後期近代という時代にとってどんな意味を持ち，どんな課題を突き付けているのか，それに光を当てるのがこのシンポジウムの目的であった。このきわめて珍しいテーマのシンポジウムに，全国から30名近い参加者があったのは望外の喜びだった。

シンポジウムでは，最初に丹羽卓（金城学院大学キリスト教文化研究所教授）がフッタライトに関する背景知識の概略を話し，続いて「フッタライトの近代性と反近代性」と題する発表を行った。次に，鵜海未祐子（駿河台大学スポーツ科学部/現代文化学部講師）が「フッタライトにおける学校教育の受容と抵抗」という発表を行い，最後に，山本健人（大阪経済法科大学法学部助教）が「カナダにおける再洗礼派の信教の自由 ― 宗教制度主義と法多元主義の観点から」という発表で締めくくった。各発表者は，そこで出された意見や質問を踏まえて論文を執筆し，その論文原稿は編集委員会を通じて外部査読に付された。匿名査読者による詳細かつ貴重なコメントを踏まえて修正した論文が，本稿に続く丹羽，鵜海，山本による３本の論文である。

このシンポジウムは，金城学院大学キリスト教文化研究所の2019年度活動助成を受けてなされた共同研究「多文化主義カナダにおける宗教的マイノリティ」の成果の発表で，その共同研究は，主催者である丹羽が日本カ

ナダ学会の２名の気鋭の研究者に声をかけて始まったものであった。

世界的に見ても，フッタライト研究のほとんどは記述的研究・報告にとどまっていて，それを現代社会とどう関係づけるかという内容のものは少ない。３名の研究者はそうした認識に立って本共同研究に着手し，何度か研究会を重ね，互いに知らない点について学びあい，議論を深めた。そして，丹羽は社会学の見地から，鵜海は教育学の見地から，山本は法学の見地から，「現代社会におけるフッタライト」について記述研究を超える形で研究を進めた。

詳しい内容は各論文に譲るとして，ここでは本共同研究およびシンポジウムの意義について述べたい。本共同研究は，異分野の研究者の共同研究である。それだけに，本紀要に掲載された３本の論文を併せて読んでいただけば，フッタライトの問題を多面的に見ていただけるものと思う。

もとより，わずか３本の論文だけでフッタライトが「分かる」わけではない。多くはないが，フッタライトの生活を記述する研究を超えた研究も確かに存在する。しかし，それでもまだこの方向での研究は端緒についたばかりと言えよう。これまでの研究では，フッタライトの生き方の根拠についての実証的研究も十分ではない。フッタライトがなぜ500年もの間，迫害を生き延び，その信仰と基本的な生活様式を維持し続けることができたのか，その理由も説明できてはいない。また，同時代の技術の取り入れるべきものは積極的に取り入れ，逆に変えるべきでないことは頑なに守り通すという態度を支えるものは何かについての研究もできていない。また，現代の国家形態の中では，辺境地に居住しようが，国家の規範に従わないではいられない。多文化主義を国是とするカナダに居住するからこそ，フッタライトも先祖のように逃避行に出ることなく留まっていられるが，それでもカナダの法律や行政と軋轢がないわけではない（鵜飼論文と山本論文参照）。こうした問題に関する研究はカナダにおいてもまだまだ少ないが，それを進めれば，カナダの多文化主義を逆照射し，その検証を迫ることに

もなる。さらには，それが信仰の自由とか教育の権利とかいうことの再検討につながるかもしれない。こう考えると，フッタライト研究は大きな実りをもたらす可能性を秘めているのである。

フッタライトについて知ると，それはカナダの多文化主義だけでなく，もっと大きく，現代の生き方そのものへの反省も迫る。私たちが今，近代を反省する時期に入っているのだとすれば，フッタライトの生き方はひとつの参照軸となるかもしれない。たしかに，フッタライトは男女同権やLGBTQなどの点で，現代社会の目指す方向と違う立場をとる。その点では，日本も含めた世界の多くの国と同様，「遅れている」のかもしれない（丹羽論文参照）。その一方で，富のはなはだしい偏在を許し，極度の貧困や戦争を回避できない現代社会から見たら，フッタライトのコミュニティはひとつのユートピアと言えよう。全世界がそのようになるのはとうてい不可能だが，現代社会がとりつかれている価値観を見直すひとつの契機となる可能性はある。フッタライトは現代社会と異質な存在であるからこそ，それと照らし合わせることで現代の病理を知ることができる。その意味で，フッタライト研究は現代社会の研究でもありうるのである。

このように，フッタライトという集団（再洗礼派全体でも）は世界人口から見たら無視できる程度の規模であるが，それが現代社会に投げかける問いは決して無視できるものではない。それゆえ，今回の共同研究の成果であるシンポジウムと３本の論文を足掛かりとしてさらに研究が進められ，日本においてもフッタライト（のみならず再洗礼派）の研究が大きく進展すればと願っている。

金城学院大学キリスト教文化研究所教授
丹羽　卓